

2月28日「悪と戦う」マタイ福音書12:22~32

今日、私たちは福音書から「ベルゼブル論争」と呼ばれる物語を読みました。ファリサイ派の人々はイエスが悪霊に苦しみ目が見えなく、口がきけなくなってしまった人を癒されるのを見て、こんな風に罵ります「**24節 悪霊の頭ベルゼブルの力によらなければ、この者は悪霊を追い出せはしない**」ベルゼブルとは、悪霊の首領のことですが、その姿形はハエの親玉のようなものがイメージされていました。ある牧師は「イエスはハエの王様だと陰口を叩かれたのではないか」と書いておられました。ハエと言えば、汚物や生き物の死体などに群がります。イエスが病人や倒れている人を助けに行かれるのをハエのようだと揶揄して、貶めようとしたのではないかと・・・そう考えると、弱い者に寄り添う姿勢をあざ笑う、かなり酷い悪口であろうと思います。しかし、彼らの考えを見抜いたイエスはこう反論されました。「**26節 サタンがサタンを追い出せば、それは内輪もめだ。そんなふうでは、どうしてその国が成り立って行くだろうか。**」「**27節 わたしがベルゼブルの力で悪霊を追い出すのなら、あなたたちの仲間は何の力で追い出すのか。**」ファリサイ派の中にも悪霊払いをしている者たちもいましたので、仮にイエスの力がサタンのものだとしたら、そちらはどうなるのかと論理の矛盾を突いたのです。この後のファリサイ派の人々の反応は描かれていませんが、おそらく言いくるめられてさらに怒りを燃やしたのではないのでしょうか。

今日の物語を読みながらこんな疑問を持った人はいないでしょうか？ どうしてファリサイ派の人々は病を癒す人、つまり良いことをしている人を見て、こんな悪意に満ちた反応が出来るのか？ よっぽどひねくれていたのか？ と。ファリサイ派とはどういう人たちなのか・・・聖書ではイエスに敵対する立場として登場するのであまり良いイメージがないかもしれませんが、私のイメージではファリサイ派の人々はとってもまっすぐな人たちでした。彼らは「どうすれば、一般的な日常生活を送りながら（祭司などの特別な職業でなくとも）神の言葉に忠実に生きることが出来るか」を考えた人たちです。聖書を日常生活を踏まえて解釈し、その中でぶつか

るであろう様々な穢れや罪を遠ざけて清い生活を送ることを目指したのです。ある意味、誰よりも熱心に神の言葉に聴き従おうとし、誰よりも熱心に神の国が来るのを待ち望んでいた人たちなのです。

事実、彼らの説く生き方は多くの人には受け入れられました、けれども、清い人と清くない人に分けると言う考え方は、そこからはみ出る人たちをも生み出します。重い病や障害を負った人たちは穢れた人として扱われず。徴税人に代表される律法の規定を守ることが出来ない特定の職業の人たちは罪びととされます。そうやって、多くの人を神の救いへと導く一方で、少数のマイノリティを罪人として裁き、社会的に排除することになっていくのです。イエスはそのことを大変問題視しました。イエスの辛辣なファリサイ派批判の言葉があります。「**マタイ 23:25 律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。杯や皿の外側はきれいにするが、内側は強欲と放縦で満ちているからだ**」そして、彼らによって追い出された病人、罪びとたちと一緒に過ごし、彼らにこそ神の愛が注がれていることを告げたのです。ファリサイ派の人たちとイエス一派がぶつかることは目に見えていました。

今日の少し前を読んでみると、ファリサイ派にとってイエスの存在が目障りに思えたのが、安息日を軽視することだったようです。安息日であっても、弟子たちは空腹を覚えると麦の穂を摘んで（つまり禁じられている労働をして）食べることができました。安息日であっても、イエスは病気の人がやってきたならば癒しました。ファリサイ派の人たちにとってはそれが何よりも許し難いことだったのです。彼らの最も大切にしている律法を踏みにじる行為に思えたのです。それは殺意を覚えるほどでした(14節)。だから、ファリサイ派の人々にはイエスのやることなすこと全てが悪意をもって見えるのです。イエスが罪の赦しを語れば、神を冒瀆する者に見えるのです。イエスが病の人を癒すならば、それは病人に群がるハエの王「ベルゼブル」に見えるのです。ファリサイ派の人々にはイエスの福音が届かなかったのです。「**わたしが神の霊で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ。**」神の国の到来を最も待ち望んでいたファリサイ派の人々が、最も神の国から遠いところにいたという

のは何という皮肉でしょうか・・・

以前、大学の友人4人と集まって食事に行ったときのことでした。ふと店内のテレビでニュースが流れました。「2011年東日本大震災における原発事故に訴訟が起きている。原告団の中には、幼い子供を抱えた女性たちが大勢いて、その方々が原発に反対するデモを行いました。」それを見て一人がこう言ったのです。「こいつらホンマに母親か？狂ってる！このクソ暑い中、自分の子どもを利用してデモするなんて！」「えー！！」と思いました。と言うのも、私は全く逆で女性たちに好意的だったからです。当時、私は神戸の教会で「ふくしま・こうべ子どもプログラム」という東日本大震災の被災地で放射能の健康被害に悩む親子のための保養プログラムに関わっていて、まさにデモに参加されているような方々の声をたくさん聴いていたのです。けれども、もう一人も言います。「そもそも、原発を無くしたら日本の産業が成り立たなくなるだろ！」ちょっと私は考え込んでしまいました。子どもをデモに参加させることに反対したのは警察官をしている友人でした。デモが起これば警備に駆り出され、厳しく監視しなければなりません。原発がなければ困ると言ったのは、自動車メーカーに勤める友人でした。電力が止まってしまえば仕事が無くなりますから、彼の意見にも正当性があります。「それでも！」と思い、私は自分の体験から子どもたちの健康にいつも怯えて暮らすことをお母さんたちがどれほど心配して過ごしているか、子どもたちもどれほど多くのストレスを受けているかを話しました。皆、黙り込んで、食事会の空気が重くなったので、別の話題へと移りました・・・

私たちにはそれぞれ自分の置かれている立場があります。そこから全く自由に物事を見たり、考えたりすることは出来ません。他者の主張を受け入れることは非常に難しいのです。ファリサイ派の人たちもそうでした。自分たちで築き上げてきた掟や、在り方がある。イエスと言う男は壊そうとしている。無下にしようとしている。そう思った時、イエスの福音は彼らの耳には全く届かなくなったのです。あいつは「ハエの王だ」そう思っ

て罵っておけば、自分たちの過ちや罪に気付く必要がないからです。そんな自分自身を変えることへの恐れ、自分自身の在り方を見つめなおすことへの恐れが、私たちをイエスから遠ざけるのです。彼らの恐れは殺意へと変えられて、救い主イエスを十字架へとつけることになります。

私たちはこのファリサイ派を単純に悪と断ずることが出来るでしょうか？私には出来ません。彼らの姿は私たちの姿そのものです。私自身も、ファリサイ派となり、無自覚に他者を裁き、自分を変えることを恐れていることがあります。讃美歌 510 の一節です。「敵は外にも内にもある」私たちは私たち自身の中にある罪と向き合わなければなりません。そう思う時、イエスの言葉が響いてきます。「**人の子に言い逆らう者は赦される。**」変化を恐れ、福音を受け入れることを拒む私たち、そんな私たちであってもイエスは赦すと言ってくださいます。そして「**神の国はあなたたちのところに来ているのだ。**」と招き続けてくださいます。私たちはレントの時期を迎えています。悔い改めの時期を迎えています。今一度、自分自身の在り方を、罪を見つめなおしたいと思います。そして、変わらず私たちを赦し、招き続ける神の愛に応えたいと思うのです。